

忠義

芥川龍之介



板倉修理いたくらしゆりは、病後の疲労がやや稍恢復すると同時に、はげしい神経衰弱に襲われた。――

肩がはる。頭痛がする。日頃好んでする書見にさえ、身がはいらない。廊下ろうかを通る人の足音とか、家中かちゆうの者の話声とかが聞えただけで、すぐ注意がみだ擾されてしまう。それがだんだん嵩こつじて来ると、今度は極些細ごくさいな刺戟からも、絶えず神経を虐さいまれるような姿になった。

第一、苘盆たばこぼんの蒔絵まきえなどが、黒地に金きんの唐草からくさをは這わせていると、その細い蔓つるや葉がどうも気になって仕方がない。そのほか象牙ぞうげの箸はしとか、青銅の火箸とか云う先の尖とがった物を見ても、やはり不安になって来る。しまいには、畳たたみの縁へりの交叉かどした角

や、天井の四隅よすみまでが、丁度刃物はものを見つめてゐる時のような切ない神経の緊張を、感じさせるようになった。

修理しゆりは、止むを得ず、毎日陰気な顔をして、じつと居間に
いすくまつていた。何をどうするのも苦しい。出来る事なら、
このまま存在の意識もなくなしてしまいたいと思う事が、度々
ある。が、それは、ささくれた神経の方で、許さない。彼は、
蟻地獄ありじごくに落ちた蟻のような、いら立たしい心で、彼の周囲を
見まわした。しかも、そこにあるのは、彼の心もちに何の理
解もない、徒いたずらに万一を惧おそれている「譜代ふだいの臣」ばかりである。
「おれ己は苦しんでいる。が、誰も己の苦しみを察してくれるもの
がない。」——そう思う事が、既に彼には一倍の苦痛であつた。
修理の神経衰弱は、この周囲の無理解のために、一層昂進
の度を早めたらしい。彼は、事毎ことごとに興奮した。隣屋敷まで聞

えそんな声で、わめき立てた事も一再ではない。刀架かたなかけの刀に手のかかった事も、度々ある。そう云う時の彼はほとんど誰の眼にも、別人のようになってしまふ。ふだん黄いろく肉の落ちた顔が、どこと云う事なく瘰癧けいれんして眼の色まで妙に殺氣立って来る。そうして、発作ほっさが甚しくなると、必ず左右の鬢びんの毛を、ふるえる両手で、かきむしり始める。——近習きんじゆの者は、皆この鬢をむしるのを、彼の逆上した索引さくいんにした。そう云う時には、互に警いましめ合つて、誰も彼の側へ近づくものがない。

発狂——こう云う怖れは、修理自身にもあつた。周囲が、それを感じていたのは云うまでもない。修理は勿論、この周囲の持っている怖れには反感を抱いている。しかし彼自身の感ずる怖れには、始めから反抗のしようがない。彼は、発作

が止んで、前よりも一層幽鬱な心が重く頭を圧して来ると、時としてこの怖れが、稲妻のように、己おのれを脅かすのを意識した。そうして、同時にまた、そう云う怖れを抱くことが、既に発狂の予告のような、不吉ふきつな不安にさえ、襲われた。「発狂したらどうする。」

——そう思うと、彼は、俄にわかに眼の前が、暗くなるような心もちがした。

勿論この怖れは、一方絶えず、外界の刺戟から来るいら立たしさに、かき消された。が、そのいら立たしさがまた、他方では、ややもすると、この怖れを眼ざめさせた。——云わば、修理の心は、自分の尾を追いかける猫のように、休みなく、不安から不安へと、廻転していたのである。

修理しゆりのこの逆上は、少からず一家中の憂慮する所となつた。中でも、これがために最も心を勞したのは、家老の前島林右衛門である。

林右衛門は、家老と云つても、実は本家の板倉いたくら式部しきぶから、附人つけびととして来ているので、修理も彼には、日頃から一目置いちもくいていた。これはほとんど病苦と云うものの経験あかのない、赭あから顔の大男で、文武の両道ひいに秀ひいでている点では、家中かちゆうの侍で、彼の右に出るものは、幾人もない。そう云う関係上、彼はこれまで、始終修理しゆりに対して、意見番の役を勤めていた。彼が「板倉おおくぼ家の大久保彦左ひこざ」などと呼ばれていたのも、完まくこの忠諫ちゆうかん

を進める所から来た渾名あだなである。

林右衛門は、修理の逆上が眼に見えて、進み出して以来、夜の目も寝ないくらい、主家のために、心を煩わづらわした。——既に病気が本復した以上、修理は近日中に病緩びようかんの御礼として、登城とじょうしなければならぬ筈である。所が、この逆上では、登城の際、附合つきあいの諸大名、座席同列の旗本仲間へ、どんな無礼を働くか知れたものではない。万一それから刃傷沙汰にんじょうさたにでもなった日には、板倉家七千石は、そのまま「お取りつぶし」になつてしまう。殷鑑いんかんは遠からず、堀田稻葉ほつたいなばの喧嘩けんかにあるではないか。

林右衛門は、こう思うと、居ても立つても、いられないよ
うな心もちがした。しかし彼に云わせると、逆上は「体の病」
ではない。全く「心の病」である——彼はそこで、放肆ほうしを諫めいさ

たり、奢侈しやしを諫めたりするのと同じように、敢然として、修理の神経衰弱を諫めようとした。

だから、林右衛門は、爾来じらい、機会さえあれば修理に苦諫くかんを進めた。が、修理の逆上は、少しも鎮まるけはいがない。寧むしろ、諫めれば諫めるほど、焦れれば焦れるほど、眼に見えて、進んで来る。現に一度などは、危く林右衛門を手討ちにさえ、しようとした。「主を主とも思わぬ奴じゃ。本家の手前さえなくば、切つてすてようものを。」——そう云う修理の眼の中にあつたものは、既に怒りばかりではない。林右衛門は、そこに、また消し難い憎しみの色をも、読んだのである。

その中うちに、主従の間に纏綿てんめんする感情は、林右衛門の重ねる苦諫に従つて、いつとなく荒すさんで来た。と云うのは、独り修理が林右衛門を憎むようになったと云うばかりではない。林

右衛門の心にもまた、知らず知らず、修理に対する憎しみが、芽をふいて来た事を云うのである。勿論、彼は、この憎しみを意識してはいなかつた。少くとも、最後の一刻を除いて、修理に対する彼の忠心は、終始変らないものと信じていた。「君君きみきみた為らざれば、臣臣きみきみた為らず」——これは孟子もうしの「道」だつたばかりではない。その後うしろには、人間の自然の「道」がある。しかし、林右衛門は、それを認めようとしなかつた。……

彼は、飽あくまでも、臣節を尽そうとした。が、苦諫の効がない事は、既に苦い経験なを嘗なめている。そこで、彼は、今まで胸中に秘していた、最後の手段に訴える覚悟をした。最後の手段と云うのは、ほかでもない。修理を押し込め隠居にして、板倉一族の中から養子をむかえようと云うのである。——
何よりもまず、「家」である。（林右衛門はこう思った。）当

主は「家」の前に、犠牲にしなければならぬ。ことに、板倉本家は、乃祖だいそ板倉四郎左衛門勝重かつしげ以来、未嘗いまだかつて、瑕瑾かきんを受け、た事のない名家である。二代又左衛門重宗しげむねが、父の跡をうけて、所司代しよしだいとして令聞れいぶんがあつたのは、数えるまでもない。その弟の主水重昌もんどしげまさは、慶長十九年大阪冬の陣の和が媾こうぜられた時に、判元見届はんもとみとどけの重任かたじけなを辱かたじけなくしたのを始めとして、寛永十四年島原の乱に際しては西国さいごくの軍に将として、將軍家御名代ごみょうだいの旗を、天草征伐の陣中にひるがえ翻した。その名家に、万一汚辱を蒙あまくさらせるような事があつたならば、どうしよう。臣子の分として、九原きゆうげんの下、板倉家累代るいだいの父祖に見ゆべき顔かんばんせは、どこにもない。

こう思った林右衛門は、私ひそかに一族うちの中を物色した。すると幸い、当時若年寄を勤めている板倉佐渡守さどのかみには、部屋住へやずみの子

息が三人ある。その子息の一人を跡目あとめにして、養子願さえすれば、公辺こうへんの首尾は、どうにでもなるう。もつともこれは、事件の性質上修理や修理の内室には、密々で行わなければならぬ。彼は、ここまで思案をめぐらした時に、始めて、明るみへ出たような心もちがした。そうして、それと同時に今までに覚えなかつたある悲しみが、おのずからその心もちを曇らせようとするのが、感じられた。「皆御家おぼやのためじゃ。」——そう云う彼の決心の中には、彼自身おぼや臆おそげにしか意識しない、何ものかを弁護しようとするある努力が、月の暈かきのようにそれとなく、つきまとつていたからである。

病弱な修理は、第一に、林右衛門の頑健な体を憎んだ。それから、本家の附人として、彼が陰に持つている権柄を憎んだ。最後に、彼の「家」を中心とする忠義を憎んだ。「主を主とも思わぬ奴じや。」——こう云う修理の語の中には、これらの憎しみが、燻りながら燃える火のように、暗い焰を蔵していたのである。

そこへ、突然、思いがけない非謀が、内室の口によって伝えられた。林右衛門は修理を押込め隠居にして、板倉佐渡守の子息を養子に迎えようとする。それが、偶然、内室の耳へ洩れた。——これを聞いた修理が、眦を裂いて憤つたのは無理もない。

成程、林右衛門は、板倉家を大事に思うかも知れない。が、

忠義と云うものは現在仕えている主人を蔑ないがしろにしてまでも、「家」のためを計るべきものであろうか。しかも、林右衛門の「家」を憂うれえるのは、杞憂きゆうと云えば杞憂である。彼はその杞憂のために、自分を押し込め隠居にしようとした。あるいはその物々しい忠義呼よばわりの後に、あわよくば、家を横領しようとする野心でもあるのかも知れない。——そう思うと修理は、どんな酷刑こっけいでも、この不臣おこないの行を罰するには、軽すぎるように思われた。

彼は、内室からこの話を聞くと、すぐに、以前彼の乳人めのとを勤めていた、田中宇左衛門という老人を呼んで、こう言った。

「林右衛門めを縛しばり首にせい。」

宇左衛門は、半白の頭を傾けた。年よりもふけた、彼の顔は、この頃の心労で一層皺しわを増している。——林右衛門の企くわだ

ては、彼も快くは思っていない。が、何と云つても相手は本家からの附人つけびとである。

「縛り首は穩便おんびんでございますまい。武士らしく切腹でも申しつけまするならば、格別でございませうが。」

修理はこれを聞くと、嘲笑あざわらうような眼で、宇左衛門を見た。そうして、二三度強く頭を振った。

「いや人でなし奴めに、切腹を申しつける廉かどはない。縛り首にせい。縛り首にじや。」

が、そう云いながら、どうしたのか、彼は、血の色のない頬ほおへ、はらはらと涙を落した。そうして、それから——いつものように両手で、鬢びんの毛をかきむしり始めた。

縛り首にしろと云う命が出た事は、直ただちに腹心の近習きんじゆから、林右衛門に伝えられた。

「よいわ。この上は、林右衛門も意地こまぬづくじや。手を拱こまぬいて縛り首もうたれまい。」

彼は昂然として、こう云つた。そうして、今まで彼につきまどつていた得体えたいの知れない不安が、この沙汰を聞くと同時に、跡方なく消えてしまふのを意識した。今の彼の心にあるものは、修理に対するあからさまな憎しみである。もう修理は、彼にとつて、主人ではない。その修理を憎むのに、何の憚はたかる所があるろう。——彼の心の明るくなつたのは、無意識ながら、全く彼がこう云う論理を、刹那せつなの間に認めたからであ

る。

そこで、彼は、妻子家来を引き具して、白昼、修理の屋敷を立ち退いた。作法通り、立ち退き先の所書きは、座敷の壁に貼つてある。槍も、林右衛門自ら、小腋にして、先に立つた。武具を担つたり、足弱を扶けたりしている若党草履取を加えても、一行の人数は、漸く十人にすぎない。それが、とり乱した気色もなく、つれ立って、門を出た。

えんきよう

延享四年三月の末である。門の外では、生暖い風が、桜の

すなほこり

花と砂埃とを、一つに武者窓へふきつけている。林右衛門は、その風の中に立って、もう一応、往来の右左を見廻した。そうして、それから槍で、一同に左へ行けと相図をした。

林右衛門りんえもんの立ち退のいた後は、田中宇左衛門が代つて、家老を勤めた。彼は乳人めのとをしていた関係上、修理しゆりを見る眼が、自らほかの家来とはちがっている。彼は親のような心もちで、修理きやうじやうの逆上をいたわつた。修理もまた、彼にだけは、比較的従順に振舞つたらしい。そこで、主従の關係は、林右衛門のいた時から見ると、遙なめらかに滑なめらかになつて来た。

宇左衛門は、修理ほつせの発作が、夏が来ると共に、漸おこたく怠り出したのを喜んだ。彼も万一修理が殿中で無礼を働きはしないかと云う事を、惧おそれない訳ではない。が、林右衛門は、それに関かかわる大事として、惧れた。併し、彼は、それを「主しゆう」に関する大事として惧れたのである。

勿論、「家」と云う事も、彼の念頭には上のほつていた。が、変

があるにしてもそれは単に、「家」を亡すが故に、大事なのではない。「主」しゅをして、「家」を亡さしむるが故に——「主」しゅをして、不孝の名を負わしむるが故に、大事なのである。では、その大事を未然みぜんに防ぐには、どうしたら、いいであろうか。この点になると、宇左衛門は林右衛門ほど明瞭な、意見を持つていないようであった。恐らく彼は、神明の加護と自分の赤誠とで、修理の逆上の鎮まるように祈るよりほかは、なかつたのであろう。

その年の八月一日、徳川幕府では、所謂八朔いわゆるはつぎくの儀式を行う日に、修理は病後初めての出仕しゅっしをした。そうして、その序ついでに、当時西丸にしまるにいた、若年寄の板倉佐渡守を訪うて、帰宅した。が、別に殿中では、何も粗勿そそうをしなかつたらしい。宇左衛門は、始めて、愁眉しゅうびを開く事が出来るような心もちがした。

しかし、彼の悦びは、その日一日だけでも、続かなかつた。夜よるになると間もなく、板倉佐渡守から急な使があつて、早速来るようにと云う沙汰が、凶兆きょうちょうのように彼を脅おびしたからである。夜陰に及んで、突然召しを受ける。——そう云う事は、林右衛門の代から、まだ一度も聞いた事がない。しかも今日は、初めて修理が登城をした日である。——宇左衛門は、不吉ふきつな予感に襲われながら、慌あわただしく佐渡守の屋敷へ参候した。

すると、果して、修理が佐渡守に無礼の振舞があつたと云う話である。——今日出仕を終つてから、修理は、白帷子しろかたびらに長上下ながかみしものまま、西丸の佐渡守を訪れた。見た所、顔色かおいろもすぐれないようだから、あるいはまだ快癒がはかばかしくないのかと思つたが、話して見ると、格別、病人らしい容ようす子もない。そこで安心して、暫く世間話をしていゝ中に、偶然、佐

渡守が、いつものように前島林右衛門の安否を訊ねた。すると、修理は急に額を暗くして、「林右衛門めは、先頃さきごころ、手前屋敷を駈落ちかけお致してござる。」と云う。林右衛門が、どう云う人間かと云う事は、佐渡守もよく知っている。何か仔細しさいがなくては、妄みだりに主家を駈落ちしゆかなどする男ではない。こう思つたから、佐渡守は、その仔細を尋ねると同時に、本家からの附人つけびとにどう云う間違まちがいが起つても、親類中へ相談なり、知らせなりしないのは、穩おだやかでない旨を忠告した。ところが、修理は、これを聞くと、眼の色を変えながら、刀の柄つかへ手をかけて、「佐渡守殿は、別して、林右衛門めを鼻ひいきにせられるようござるが、手前家来の仕置は、不肖ながら手前一存で取計らい申す。如何に当時出頭しゅとうの若年寄でも、いらぬ世話はお置きなさい。」と云う口上である。そこでさすがの佐渡守も、あまり

の事に呆あきれ返つて、御用繁多を幸に、早速その場を外はずしてしまつた。――

「よいか。」ここまで話して来て、佐渡守は、今更のように、苦い顔をした。

――第一に、林右衛門の立ち退いた趣を、一門衆へ通達しないのは、宇左衛門の罪である。第二に、まだ逆上の気味のある修理を、登城させたのも、やはり彼の責を免れない。佐渡守だったから、いいが、もし今日のような雑言ぞうごんを、列座の大名衆にでも云つたとしたら、板倉家七千石は、忽たちまち、改易かいえきになつてしまう。――

「そこでじゃ。今後は必ずとも、他出無用に致すように、別して、出仕登城の儀は、その方より、堅くさし止むるがよい。」佐渡守は、こう云つて、じろりと宇左衛門を見た。

「唯だ主につれて、その方まで逆上しそうなのが、心配じゃよいか。きっと申しつけたぞ。」

宇左衛門は眉をひそめながら、思切った声で答えた。

「よろしゅうござりまする、しかと向後は慎むでございませう。」

「おお、二度と過あやまちをせぬのが、何よりじゃ。」

佐渡守は、吐き出すように、こう云った。

「その儀は、宇左衛門、一命にかけて、承知仕りました。」

彼は、眼に涙をためながら懇願するように、佐渡守を見た。が、その眼の中には、哀憐あわれんを請う情と共に、犯し難い決心の色が、浮んでいる。——必ず修理の他出を、禁ずる事が出来ると云う決心ではない。禁ずる事が出来なかつたら、どうすると云う、決心である。

佐渡守は、これを見ると、また顔をしかめながら、面倒臭
そうに、横を向いた。

「主」の意に従えば、「家」が危い。「家」を立てようとすれ
ば、「主」の意に悖る事になる。嘗は、林右衛門も、この苦境
に陥っていた。が、彼には「家」のために「主」を捨てる勇
気がある。と云うよりは、むしろ、始からそれほど「主」を
大事に思っていない。だから、彼は、容易く、「家」のために
「主」を犠牲にした。

しかし、自分には、それが出来ない。自分は、「家」の利害

だけを計るには、余りに「主」に親しみすぎている。「家」のために、ただ、「家」と云う名のために、どうして、現在の「主」を無理に隠居などさせられよう。自分の眼から見れば、今の修理も、破魔弓こそ持たないものの、幼少の修理と変りがない。自分が絵解きをした絵本、自分が手をとって習わせた難波津の歌、それから、自分が尾をつけた紙鳶——そう云う物も、まざまざと、自分の記憶に残っている。……

そうかと云つて、「主」をそのままにして置けば、独り「家」が亡びるだけではない。「主」自身にも凶事が起りそうである。利害の打算から云えば、林右衛門のとつた策は、唯一の、そうしてまた、最も賢明なものに相違ない。自分も、それは認めている。その癖、それが、自分には、どうしても実行する事が出来ないのである。

遠くで稻妻いなずまのする空の下を、修理の屋敷へ帰りながら、宇左衛門は悄然しやうぜんと腕を組んで、こんな事を何度となく胸の中で繰り返えした。

修理しゆりは、翌日、宇左衛門から、佐渡守の云い渡した一部始終を聞くと、忽ち顔を曇らせた。が、それぎりで、格別いつものように、とり上のほせる気色けしきもない。宇左衛門は、氣づかないながら、幾分か安堵あんどして、その日はそのまま、下つて来た。

それから、かれこれ十日ばかりの間、修理は、居間にとじこもつて、毎日ぼんやり考え事に耽つていた。宇左衛門の顔

を見ても、口を利かない。いや、ただ一度、小雨こさめのふる日に、時鳥ほととぎすの啼く声を聞いて、「あれは鶯の巢をぬすむそうじやな。」とつぶやいた事がある。その時でさえ、宇左衛門が、それを潮しほに、話しかけたが、彼は、また黙って、うす暗い空へ眼をやってしまった。そのほかは、勿論、唾おしのように口をつぐんで、じつと襖障子ふすましようじを見つめている。顔には、何の感情も浮んでいない。

所が、ある夜、十五日の総出仕が二三日の中に迫った時の事である。修理は突然宇左衛門をよびよせて、人払いの上、陰気な顔をしながら、こんな事を云った。

「先達せんだつて、佐渡殿も云われた通り、この病体では、とても御奉公おほつかは覚束ないようじや。ついては、身共もいつそ隠居しようかと思う。」

宇左衛門は、ためらった。これが本心なら、元よりこれに越した事はないが、どうして、修理はそれほど容易に、家督を譲る気になれたのであろう。――

「御尤もでていもつとございます。佐渡守様もあのように、仰せられますからは、残念ながら、そうなさるよりほかはございますまい。が、まず一応は、御一門衆へも……」

「いや、いや、隠居の儀なら、林右衛門の成敗とは変って、相談せずとも、一門衆は同意の筈じゃ。」

修理、こう云つて、苦々にがにがしげに、微笑した。

「さようでもございますまい。」

宇左衛門は、傷しいたまそうな顔をして、修理を見た。が、相手は、さらに耳へ入れる容子ようすもない。

「さて、隠居すれば、出仕しようと思つても出仕する事は出

来ぬ。されば、「修理はじつと宇左衛門の顔を見ながら、一句、重みを量はかるように、「その前に、今一度出仕して、西丸の大御所様（吉宗）へ、御目通りがしたい。どうじゃ。十五日に、登城とじょうさせてはくれまいか。」

宇左衛門は、黙って、眉をひそめた。

「それも、たった一度じゃ。」

「恐れながら、その儀ばかりは。」

「いかぬか。」

二人は、顔を見合せながら、黙った。しんとした部屋の中には、油を吸う燈心の音よりほかに、聞えるものはない。――

宇左衛門は、この暫くの間を、一年のように長く感じた。佐渡守へ云い切った手前、それを修理に許しては自分の武士がたたないからである。

「佐渡殿の云われた事は、承知の上での頼みじや。」

ほどを経て、修理が云った。

「登城を許せば、その方が、一門衆の不興ふきやうをうける事も、修理は、よう存じているが、思うて見い。修理は一門衆はもとより、家来けらいにも見離された乱心者じや。」

そう云いながら、彼の声は、次第に感動のふるえを帯びて来た。見れば、眼も涙ぐんでいる。

「世の嘲あざわらりはうける。家督は人の手に渡す。天道の光さえ、修理にはささぬかと思うような身の上じや。その修理が、今生の望にただ一度、出仕したいと云う、それをこばむような宇左衛門ではあるまい。宇左衛門なら、この修理を、あわれとこそ思え、憎いとは思わぬ筈じや。修理は、宇左衛門を親とも思う。兄弟とも思う。親兄弟よりも、猶なほ更さらなつかしいも

のと思う。広い世界に、修理がたのみに思うのは、ただその方一人きりじゃ。さればこそ、無理な頼みもする。が、これも決して、一生に二度とは云わぬ。ただ、今度こんど一度だけじゃ。宇左衛門、どうかこの心を察してくれい。どうかこの無理を許してくれい。これ、この通りじゃ。」

彼は、家老の前へ両手をついて、涙を落しながら、額ひたいを畳へつけようとした。宇左衛門は、感動した。

「御手をおあげ下さいまし。御手をおあげ下さいまし。勿体もったいのうございます。」

彼は、修理の手をとって、無理に畳から離させた。そうして泣いた。すると、泣くに従って、彼の心には次第にある安心あふが、溢れるともなく、溢れて来る。——彼は涙なかの中に、佐渡守の前で云い切った語ことばを、再びありありと思ひ浮べた。

「よろしゅうございます。佐渡守様が何とおっしゃりましようとも、万一の場合には、宇左衛門しわばら皺腹つかまつを仕れば、すむ事でございます。私わたくしひとり一人の粗忽そこつにして、きつと御登城おさせ申しましょう。」

これを聞くと、修理の顔は、急に別人の如く喜びにかがやいた。その変り方には、役者のような巧みさがある。がまた、役者にならないような自然さもある。——彼は、突然調子の外れはずた笑い声を洩もらした。

「おお、許してくれるか。かたじけな忝かたじけない。忝かたじけないぞよ。」
そう云つて、彼は嬉しそうに、左右を顧みた。

「皆のもの、よう聞け。宇左衛門は、登城を許してくれたぞ。」
人払いをした居間には、彼と宇左衛門のほかに誰もいない。皆のもの——宇左衛門は、気づかわしそうに膝ひざを進めて、行燈あんどう

の火影ほかげに恐る恐る、修理の眼の中を窺うかがった。

三 刃傷にんじょう

延享四年八月十五日の朝、五つ時過ぎえんきように、修理しゆりは、殿中で、何の恩怨おんえんもない。肥後国熊本の城主、細川越中守宗教ほそかわえつちゆうのかみむねのりを殺害せつがいした。その顛末てんまつは、こうである。

細川家は、諸侯の中でも、すぐれて、武備に富んだ大名である。元姫君もとひめぎみと云われた宗教むねのりの内室さえ、武芸の道には明あかるかつ

た。まして宗教の嗜みに、疎な所などのあるべき筈はない。それが、「三齋さんさいの末なればこそ細川は、二歳にさいに斬きられ、五歳ごさいごとなる。」と諷うたわれるような死を遂げたのは、完まったく時の運であらう。

そう云えば、細川家には、この凶變きようへんの起る前兆が、後のちになつて考えれば、幾つもあった。——第一に、その年三月中旬、品川伊佐羅子いさらかごの上屋敷かみやしきが、火事で焼けた。これは、邸内みやうけんに妙見大菩薩があつて、その神前の水吹石みずふきいしと云う石が、火災のある毎ごとに水を吹くので、未嘗いまだかつて、焼けたと云う事のない屋敷である。第二に、五月上旬、門へ打つ守り札を、魚籃ぎよらんの愛染院あいぜんいんから奉つたのを見ると、御武運長久御息災ごそくさいとある可き所に災の字が書いてない。これは、上野宿坊しゆくぼうの院代いんだいへ問い合せた上、早速愛染院に書き直させた。第三に、八月上旬、屋敷の広間あたり

から、夜な夜な大きな怪火が出て、芝の方へ飛んで行つたと云う。

そのほか、八月十四日の昼には、天文に通じている家来の才木茂右衛門さいきもえもんと云う男が目付めつけへ来て、「明十五日は、殿の御身おんみに大變があるかも知れませぬ。昨夜さくや天文を見ますと、将星が落ちそうになつて居ります。どうか御慎み第一に、御他出なぞなさいませんよう。」と、こう云つた。目付は、元来余り天文なぞに信を措おいていない。が、日頃この男の予言は、主人が尊敬しているので、取あえず近習きんじゆの者に話して、その旨を越中守の耳へ入れた。そこで、十五日に催す能狂言のうきょうげんとか、登城の歸りに客に行くとか云う事は、見合せる事になつたが、御奉公の一つと云う廉かどで、出仕だけは止めやにならなかつたらしい。

それが、翌日になると、また不吉な前兆が、加わった。——十五日には、いつも越中守自身、麻上下に着換えてから、八幡大菩薩に、神酒を備えるのが慣例になっている。ところが、その日は、小姓の手から神酒を入れた瓶子を二つ、三宝へさせたまま受取つて、それを神前へ備えようとすると、どうした拍子か瓶子は二つとも倒れて、神酒が外へこぼれてしまった。その時は、さすがに一同、思わず顔色を変えたと言う事である。

翌日、越中守は登城すると、御坊主田代祐悦が供をして、ま

ず、大広間へ通つた。が、やがて、大便を催したので、今度は御坊主黒木閑齋かんさいをつれて、湯呑み所際じよぎわの廁かわやへはいつて、用を足たした。さて、廁を出て、うすぐらい手水所ちやうずとじろで手を洗つていると突然後うしろから、誰とも知れず、声をかけて、斬りつけたものがある。驚いて、振り返ると、その拍子にまた二の太刀が、すかさず眉間みけんへ閃ひらめいた。そのために血が眼へはいつて、越中守は、相手の顔も見定める事が出来ない。相手は、そこへつけこんで、たたみかけ、たたみかけ、幾いくた太刀となく浴せかけた。そうして、越中守がよろめきながら、とうとう、四しの間まの縁たおに仆たおれてしまうと、脇差わきざしをそこへ捨てたなり、慌あわててどこか見えなくなつてしまつた。

ところが、伴をしていた黒木閑齋が、不意の大変に狼狽ろうばいして、大広間の方へ逃げて行つたなり、これもどこかへ隠れてしまつ

たので、誰もこの刃傷を知るものがない。それを、暫くしてから、漸く本間定五郎さだごろうと云う小拾人こじゆうにんが、御番所ごばんしょから下部屋しもべやへ来る途中で発見した。そこで、すぐに御徒目付おかちめつけへ知らせる。御徒目付からは、御徒組頭久下善兵衛くげぜんべえ、御徒目付土田半右衛門はんえもん、菰田仁右衛門こもだにえもん、などが駈けつける。——殿中では忽ち、蜂はちの巣を破ったような騒動しゆつたいが出来した。

それから、一同集つて、手負ておいを抱きあげて見ると、顔も体も血まみれで誰とも更に見分ける事が出来ない。が、耳へ口をつけて呼ぶと、漸く微かすかな声で、「細川越中」と答えた。続いて、「相手はどなたでござる」と尋ねたが、「上下かみしもを着た男」と云う答えがあつただけで、その後には、もうこちらの声も通じないらしい。創きずは「首構七寸程くびがまえ、左肩六七寸ひだりかたばかり、右肩五寸ばかり、左右手四五ヶ所、鼻上耳脇かしらまた頭きずに疵二三ヶ所、背中

右の脇腹まで筋違すじかいに一尺五寸ばかりである。そこで、当番御目付土屋長太郎、橋本阿波守あわのかみは勿論、大目付河野豊前守こうのぶぜんのかみも立ち合つて、一まず手負てぶいびを、焚火たきびの間まへ昇かぎつこんだ。そうしてそのまわりを小屏風こびょうぶで囲んで、五人の御坊主を付き添つわせた上に、大広間詰の諸大名が、代る代る来て介抱かいほうした。中でも松平兵部少輔ひょうぶしょうぶは、ここへ昇かぎつこむ途中から、最も親切しんせつにいたわつたので、わき眼わきまなこにも、情誼じょうぎの篤あつさが忍しのばれたそうである。

その間に、一方では老中若年寄衆ろうじゅうへこの急変を届けた上で、万一のために、玄関先から大手まで、厳しく門々を打たせてしまった。これを見た大手先おおてさきの大小名けらいの家来けらいは、驚破すわ、殿中に椿事ちんじがあつたと云うので、立ち騒ぐ事が一通りでない。何度目付衆どめつけが出て、制しても、すぐまた、海嘯つなみのように、押し返して来る。そこへ、殿中の混雑もまた、益々甚しくなり出

した。これは御目付土屋長太郎が、御徒目付、火の番などを召し連れて、番所番所から勝手まで、根気よく刃傷の相手を探して歩いたが、どうしても、その「上下を着た男」を見つめる事が出来なかつたからである。

すると、意外にも、相手は、これらの人々の眼にはかからないで、かえつて宝井宗賀と云う御坊主のために、発見された。——宗賀は大胆な男で、これより先、一同のさがさないような場所場所を、独りでしらべて歩いてきた。それがふと焚火の間の近くの厠の中を見ると、鬢の毛をかき乱した男が一人、影のように蹲っている。うす暗いので、はつきりわからないが、どうやら鼻紙囊から鋏を出して、そのかき乱した鬢の毛を鋏んででもいるらしい。そこで宗賀は、側へよつて声をかけた。

「どなたでござる。」

「これは、人を殺したで、髪を切っているものでござる。」

男は、しわがれた声で、こう答えた。

もう疑う所はない。宗賀は、すぐに人を呼んで、この男をかわや厠の中から、ひきずり出した。そうして、とりあえず、それを御徒目付の手に渡した。

御徒目付はまた、それを蘇鉄の間そてつへつれて行って、大目付始め御目付衆立ち合ひの上で、刃傷にんじょうの仔細しさいを問い質ただした。が、男は、物々しい殿中の騒ぎを、茫然と眺めるばかりで、更に答えらしい答えをしない。偶々たまたま口を開けば、ただ時鳥ほととぎすの事を云う。そうして、そのあい間には、血に染まった手で、何度となく、鬢の毛をかきむしった。——修理は既に、発狂はつきやうして

いたのである。

細川越中守は、焚火の間で、息をひきとつた。が、大御所おおごしよ吉宗の内意を受けて、手負いと披露したまま駕籠かごで中の口から、平川口へ出て引きとらせた。公おおやけに死去の届が出たのは、二十一日の事である。

修理しゆりは、越中守が引きとつた後あとで、すぐに水野監物けんもつに預けられた。これも中の口から、平川口へ、青網あおあみをかけた駕籠かごで出たのである。駕籠のまわりは水野家の足軽が五十人、一樣に新しい柿の帷子かたびらを着、新しい白の股引かひきをはいて、新しい棒をつきながら、警固けいこした。——この行列は、監物けんもつの日頃不意

に備える手配が、行きとどいていた証拠として、当時のほめ物になったそうである。

それから七日目の二十二日に、大目付石河土佐守が、上使じょうしに立った。上使の趣は、「其方儀乱心したとは申しながら、細川越中守手疵養生不相叶致死去候に付、水野監物宅にて切腹てきずようじょうあいかなわすしきよいたし被申付者也」と云うのである。

修理は、上使の前で、短刀を法の如くさし出されたが、茫然と手を膝の上に重ねたまま、とろうとする気色けしきもない。そこで、介錯かいしゃくに立った水野の家来吉田弥三左衛門やそうざえもんが、止むを得ず後うしろからその首をうち落した。うち落したと云つても、喉のどの皮一重ひとえはのこっている。弥三左衛門は、その首を手にとつて、下から検使の役人に見せた。頬骨ほおほねの高い、皮膚の黄ばんだ、いたいたしい首である。眼は勿論つぶっていない。

檢使は、これを見ると、血のにおいを嗅ぎながら、満足そうに、「見事」と声をかけた。

同日、田中宇左衛門は、板倉式部の屋敷で、縛り首に処せられた。これは「修理病氣に付、禁足申付候様にと屹度、板倉佐渡守兼ねて申渡置候処、自身の計らいにて登城させ候故、かかる凶事出来、七千石断絶に及び候段、言語道断の不屈者」という罪状である。

板倉周防守すおうのかみ、同式部、同佐渡守、酒井左衛門尉さえもんじょう、松平右近将監うこんしょうげん等の一族縁者が、遠慮を仰せつかったのは云うまでもない。

そのほか、越中守を見捨てて逃げた黒木閑齋かんさいは、扶持ふちを召上げられた上、追放になった。

修理しゆりの刃傷にんじやうは、恐らく過失であろう。細川家の九曜くやうの星と、板倉家の九曜の巴と衣類もんじゆの紋所もんじゆが似ているために、修理は、佐渡守を刺さそうとして、誤つて越中守を害したのである。以前、毛利主水もうりもんのしやう正を、水野隼人はやとのしやう正が斬つたのも、やはりこの人違いであつた。殊に、手水所ちやうずどころのような、うす暗い所では、こう云う間違いも、起りやすい。——これが当時の定評であつた。

が、板倉佐渡守だけは、この定評をよろこばない。彼は、こ

の話が出ると、いつも苦々しげに、こう云った。

「佐渡は、修理に刃傷されるような覚えは、毛頭もうとうない。まして、あの乱心者のした事じゃ。大方、何と云う事もなく、肥後侯を斬ったのであろう。人違などとは、迷惑至極な臆測おそわじゃ。その証拠には、大目付の前へ出ても、修理は、時鳥ほととぎすがどうやら云うていたそうではないか。されば、時鳥じゃと思つて、斬ったのかも知れぬ。」

(大正六年二月)

忠義

底本：「芥川龍之介全集1」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和 61）年 9 月 24 日第 1 刷発行

1995（平成 7）年 10 月 5 日第 13 刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和 46）年 3 月～1971（昭和 46）年 11 月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号-86）を、大振りにつくっています。

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1998 年 12 月 6 日公開

2004 年 3 月 7 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。